

コロナ禍の世界

横浜市駐在員リポート

⑦

中国では、1月24日から春節休暇に続き、2月9日まで在宅生活をするよう政府から要請された。日用品はスマートフォンで注文して宅配で受け取り、マスクは地域コミュニティーを通じて購入した。仕事もテ

4月には感染者も減り、高校から順次、再開した。この頃、「仕事に行くのが楽しい」という若者の声をよく聞いた。皆と一緒に仕事をした方が元気になるらしい。

行動変容を強いられて5カ月が過ぎたが、多くの市民は美に前向きだ。少しでも良い条件を求めて転職を繰り返す人もいるし、デリバリーだけでもうける店も多い。旅行業の経営者は貿易業務などに注力している。市民の現金収入増加のため、路上販売が解禁され、郊外の農家がすぐに道端で野菜を売り始めた。明るい強さがある。

えだが、感染者が出ると測定が徹底された。退勤時に発熱すると帰宅できないため、出勤しない人も多かった。学校では全国的にオンライン授業が始まった。

（横浜市上海事務所長・川島とも子）

前向きな市民の底力

レワーク。生活は何とかあったが、発熱して受診する場合は発熱外来に行かねばならず、風邪すらひけない緊張感があった。自粛生活の忍耐は相当なものだったが、未知のウイルスへの恐怖から市民は要請以上の行動を自重し、「自分の身は自分で守る」との意識が高かった。

2月中旬から出勤者も増

上海



自主的にマスクを着けた家族連れ・若者たちでにぎわう上海市徐匯区のショッピングモール「美羅城」
＝7月4日